

## 49 適々齋薬室膠柱方について

—村上医家史料館蔵品を中心に—

古 西 義 磨

橋本まちかと博物館

適塾の基準処方集については昭和四十五年に演者が大阪市立大学付属図書館で発見し、緒方富雄氏を経て大塚恭男氏が『日本医史学雑誌』第十九卷二号に発表された。

その後の調査で、兵庫県西宮市の亥野彊宅にも適々齋薬室膠柱方が所蔵されていた。亥野家は緒方洪庵夫人八重の生家・徳川家の資料を受け継いでおられるので、徳川本と見られる。この資料は一昨年の拙著『緒方洪庵と大坂の除痘館』(二〇〇二年、東方出版刊)において両者を比較して詳しく触れたところである。

さらに 一昨年日本医史学会関西支部の大会が中津で開催された際、村上医家史料館を見学したとき、適々齋薬室膠柱方の一部が展示されており、史料館の

ご協力を得て発表させ頂く。

なお、杏雨書屋にも適々齋薬室膠柱方が所蔵されている。

そこで、本発表は村上本の紹介を中心としながらも、四点の比較を試みた。

市大本 資料名は適々齋薬室膠柱方、十一丁、

八十八劑を収録、天保九年の序文、写本(筆者不明)、「解剖略式」六丁を合綴。

徳川本 資料名は適々齋薬室膠柱方、七丁、

四十八劑を収録、天保九年の序文、写本(筆者不明)、「助忘録之一」の中の一資料。

杏雨本 資料名は適々齋薬室膠柱方、八丁、

五十四劑を収録、末尾に「天保辛丑〔十二年〕七月既望□下訳公裁未定稿」と記載、坪井信道著「遠西二十四方」・同著「診候

大概」と合綴。

村上本 資料名は適々齋常用丸散録丸劑之部、

九丁、四十六劑を収録、末尾に「元治甲子ノ年〔元年〕初夏日 村上恒手写」とある。

適々齋薬室膠柱方は適塾の基本処方集として長らく忘れられていたが、前述のようにして発見・紹介された。これは適塾塾生の指南書であり、洪庵がその知識をどのような経緯と経過で得たかを知ることが出来るのみでなく、ひろく当時の蘭方医がどのようにして処方勉強をしたかか的一端がわかるものとして高く評価されている。

大阪市立大学図書館本に続いて億川本が発見され、その比較をするとかなりの相違点があり、前述のように拙著に紹介を行った。

さらに最近閲覧を許された杏雨書屋本を市大本や億川本と比較照合すると、億川本に極めて類似していた。それとともに杏雨書屋本では、天保十二年においても洪庵がその処方を再検討していることを伺い知ることが出来る。

村上本は適々齋薬室膠柱方の中の常用丸散録丸剂一部ののみであるが、収録処方には四十五剤と多い。市大本の処方と比べると、同一処方は十三剤しか無かった。しかし、適々齋薬室膠柱方が最初に処方されたのが天

保九年（一八三八）、村上恒が手写したのが元治元年（一八六四）、その間に二十六年、四半世紀を経て、なお適々齋薬室膠柱方が新しい処方を加えながら利用されているところに、この処方集の役割の大きさを知ることが出来るのでは無からうか。

なお、村上本の筆写・村上恒について簡単に触れておく。

村上恒は村上家第九代の当主・田長（天保十年～明治三十九年、一八三九～一九〇六）である。秋月藩御典医・杉全健甫の三男として生まれ、医学を始め、儒学など幅広く学んだ。万延元年（一八六〇）村上家の養子となり、慶応元年（一八六五）に家督相続して田長と改名した。医師とともに教育者、新聞創刊などで知られている。なお、村上家第七代玄水は九州で最初に人体解剖した蘭方医として知られている。